

R S S C同窓会「異文化研究会」2012年9月研究会報告

1. 日時：2012年9月28日（金）13：00～14：40
2. 場所：立教大学セントポールズ会館2階
3. 講演：「異文化コミュニケーションへの招待」
4. 講師：久米 昭元 様（立教大学 異文化コミュニケーション学部特任教授）
5. 出席者（敬称略）
（2期）御守、山田、藤田、小泉、秋吉、福田、坂元、島田、佐藤（晴）、野口
（3期）杉山、河原木
（4期）田島、池田、平子、菅野、大戸、濱崎、青山、中島、上田、小池、金子（亮）、
中山、中島、中川
（ゲスト）：（4期）久野、山田（5期）岩田、長谷川（大学異文化コミM1）趙師哲
（大学異文化コミOB）古谷、五十嵐、石黒、関下
合計35名（2期 10名、3期 2名、4期 14名、ゲスト 9名）



久米先生



講演風景

6. 講師経歴

神戸市生まれ。1966年神戸市外国語大学英米学科卒業。
日獨薬品（株）（現在は日本シエーリング）で貿易実務、（株）インターオーサカ（現在はインターグループ）で会議通訳など計8年間勤務した後、ハワイ大学大学院アメリカ研究科修士課程修了。
1979年にミネソタ大学大学院コミュニケーション研究科博士課程修了（Ph.D.論文 対米進出日本企業における意思決定過程）。
南山大学、神戸市外国語大学、神田外語大学、立教大学社会学部などを経て現職。

7. 講演趣旨 はじめに

講演の導入として、最近の朝日新聞に掲載された青山学院大 羽場教授の寄稿記事「アジアの連携国家を超え“知”結集の場を」に展開されている「欧州地域と比較しアジア地域の知の結集度の低さを痛感する」趣旨の内容を引用しつつ、異文化研究を通し、知の結集を目指すことの必要性に触れられた。

異文化コミュニケーションとは何か？

端的に定義しようとするとなかなか難しいが、「未知との遭遇」というのが最も言い表しているのではないと思われるとのことで、先生から参加者に外国に行った時の経験で異文化を強く感じたケースについて問い掛けをされた。

Tさんは「中近東のイスラム諸国に出張で訪問したことがあるが、トイレの中でもアラールに祈りを捧げているのを見たとき、イスラム教徒はすごいとショックを受けた」。Oさんは「外国に約15年間暮らして日本に帰国したが、長い外国習慣に慣れてしまい電車のラッシュアワーで整然と押されても言葉も発せず乗り降りする日本の日常光景は、自分にとってまさに異文化になっていた」（それは自文化の喪失ですねとの先生コメントあり（笑））。

先生から、これらの参加者の経験を踏まえながら、皆さんの体験はいずれも環境が違う所での人と

の係わりが異文化コミュニケーション（「未知との遭遇」に近い経験）になっていて、大学的な硬い定義で言うと「文化的背景の相違を超えて行う相互交流」「文化的背景の異なる人々同士で行われる象徴的相互作用」と補足された。

異文化コミュニケーションの概念が生まれた背景・契機について、次のような話をされた。1970年代に先生が米国の大学に留学した当時は、コミュニケーション学科でのコミュニケーション論の授業等があったが、異文化コミュニケーション（インター・カルチャ・コミュニケーションと称されていた）の担当教官はわずか2名ほどしかいなかった。また大学の殆どの人達にコミュニケーションに文化は関係ないだろうと言われた。その後10~20年を経て、欧州をはじめとした人々との行き来が頻繁になるに伴い、彼らにも異文化コミュニケーションの必要性/重要性が認識されてきたものと思われる。

現在では、日本国内でも立教のように異文化コミュニケーション学部のような名称ではないが、国際コミュニケーション、多文化コミュニケーションというような学科を有する大学が広がってきている。また、異文化コミュニケーションのキーワードとして、自文化中心主義（自分の属する文化を中心と考える）、文化相対主義（お互いの文化を尊重し合うことであるが、人権人道の観点から難しい面もある）、多文化主義（多様な人達、民族と一緒に生活し合う）、トランスカルチュラルリテラー（各人の属する文化を超えて交流し合う）を挙げられた。

文化について

文化とは、非常に範囲が広く「慣れ親しんだ生活習慣」と言えるだろうが、先生の考える定義は、「人々のモノの考え方、一定の環境で人間が持っているそれぞれの考え方」。

従って個々人でそれぞれ違った文化を持っている。文化には目に見える表層文化と、各人の価値観、人生観のような深層文化が存在する。

また、文化を考える、論じる際には、様々な文化的背景（国家、地域、民族、人種、階級、世代、ジェンダー、親と子、上司と部下、教員と生徒、障がい者と健常者、医者と患者 etc.）について留意しておく必要がある。

コミュニケーションについて

基本的に、人と人が話し合うことですが、これは状況によってはかなり難しいことでもあり、重要な意味を持つこともある。先日の日中の最高指導者同士が国連総会で立ち話をしたが主張は平行線のままで、終了したように。コミュニケーションでは、相手をどう見るか/どう対処するか（知覚と称する）が重要な要素になってくる。

8月にロンドンオリンピックが開催されたが、「世界中の人達が集まってくるオリンピックは、異文化コミュニケーションの祭典」とも言われている。

異文化コミュニケーション研究&教育の特徴について

次のような紹介があった。

課題解決志向型研究（グローバル/日本社会での諸課題、文化摩擦） コミュニケーション研究（メッセージ分析、批評） 価値志向的研究（例；平和学） 領域横断的研究（例；地域研究） 事例研究（具体的状況重視） フィールドワーク（現場重視）

教育関係については、（カルチャショックなどの）気づき、「思い込み」からの開放、ワークショップ（グループでの議論を通じお互いの相違を認識/理解し合う）、体験学習（シュミレーション・ゲーム）、ロールプレイ（文化対照法等）国内での異文化コミュニケーション（例；北と南、都心と地方の人同士で議論すると、お互いの視線の相違が判り、複視眼的思考が出来る）等。

持参されたシュミレーションビデオの視聴：日本の会社に就職した外国人と日本人課長の仕事の取り組み方についてのやり取りを再現したビデオで、双方の文化的背景が異なることによる考え方のすれ違いを学習する内容を視聴した。

最後に久米先生が執筆された「異文化コミュニケーション事典」（2012/12 発刊予定で本邦初の事典になるとのこと）の紹介があった。

（講演聴講後の田島代表感想）異文化研究会としては、我々シニアは様々な体験はあるものの学問的立ち位置が分からず、今回の講演であいまいですが「異文化コミュニケーション」学の形が見えた気がします。我々シニアは、この学問を日本社会においては 今後「多文化共生」ということが行動行為として、課題定義されていると考えました。

(2012.10.02 菅野記)